

留学・研究計画書

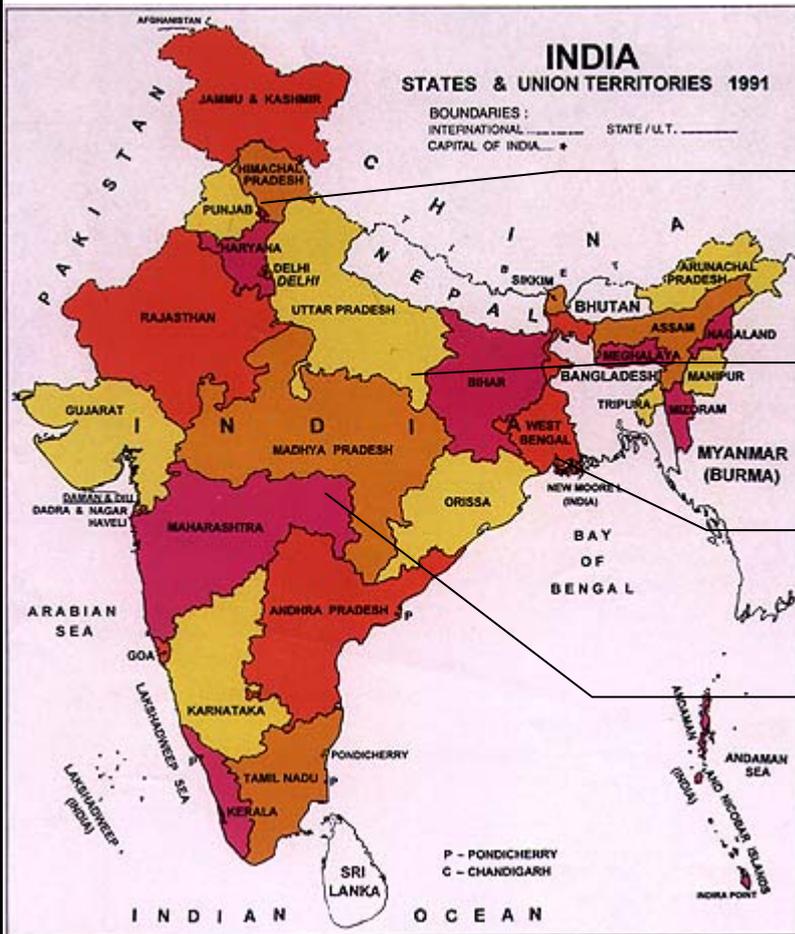
氏 名	榎木 美樹	留学機関名	Central Institute of Higher Tibetan Studies
留学先国名	インド	留学期間	西暦 2005 年 7 月 ~ 2007 年 6 月
研究テーマ (留学目的)			
インドにおける仏教徒運動の展望			
研究テーマ (留学目的) の説明			
<p>インドにおいて仏教徒運動というのは単なる宗教運動ではない。1991年のインド国勢調査で640万人(人口比0.7%)を占める彼らの9割以上は、「不可触民」階級マハールからの改宗者であるとされる。マハールは仏教への集団改宗以前、ヒンドゥー教徒で、宗教的に不浄とされており、差別の対象であった。しかし、18世紀の不可触民解放運動の盛り上がりと共に、近代人権思想の発達も伴って、マハールたちは社会的地位の向上運動を展開し、その運動の一環として宗教を変更したのである。このマハール運動の延長にあるのがナーグプル仏教徒に代表される仏教徒運動である。ナーグプル市はマハール運動の重要な拠点の1つで、現在もマハーラーシュトラ州東部の行政都市としてその任を担っている。</p> <p>この点を明示した上で、これまで私が対象としてきたナーグプル市の仏教徒に対する研究の蓄積の上に、海外の仏教系NGOおよびインド国内の他の仏教徒との関係性を明らかにすることが、今回の研究の柱である。これらの関係性を解明することは、インドにおける仏教徒の存在とその位置づけを包括的に捉え得るものであり、インドの社会構造を探る貴重な研究となる。</p> <p>上記の問題意識に沿って、研究対象をナーグプル仏教徒、ベンガル仏教徒、チベット仏教徒に設定する。インドにおける仏教徒の内訳は前述したように、90%がマハールから改宗した者たちである。残りの10%が集団改宗以前からの仏教徒および個人的改宗者ということになる。集団改宗以前からの仏教徒の代表として、ブッダの時代から帰依していたと主張する「伝統的」仏教徒がいる。ベンガル地方に居住するいわゆるベンガル仏教徒である。また、近年ノーベル平和賞の受賞とその非暴力運動で世界の注目を集めるダライ・ラマを奉ずるチベット仏教徒の存在も、インドにおける仏教徒を考察する上で欠かすことはできない。従って、ナーグプル仏教徒、ベンガル仏教徒、チベット仏教徒の3者を研究することは、インドにおける仏教徒の全体像を把握する十分な正当性を持つ。</p> <p>これらを踏まえ、インドにおける仏教徒運動の展望を具体的に考察するために、仏教徒の実態調査と彼らの運動の方向性を検討する。ナーグプル仏教徒からは、下層民衆の社会的地位向上運動の方法およびインド社会におけるその影響を探り、ベンガル仏教徒からは「伝統的」仏教の存在形態を把握する。そして外来仏教徒であるチベット仏教徒への調査と在来仏教徒との比較を通して、仏教がコミュニティの帰属意識形成に果たす役割を検討する。</p> <p>以上の研究・調査を遂行する上で、Central Institute of Higher Tibetan Studies (通称チベット大学) に在籍しロブサン・ノルブ教授の指導の下、理論研究と現地調査を合理的に行うことが本留学の目的である。</p>			

成果報告書

記入日 2007年 4月 24日

氏名	榎木 美樹	留学先国名	インド	所属機関	Central Institute of Higher Tibetan Studies
研究テーマ： インドにおける仏教徒運動の展望					
留学期間： 2005年 7月～ 2007年 3月					
<h2>1. 留学と調査の概要</h2> <p>私の取り組む研究は、インドにおける仏教徒社会の構造を解明することであった。</p> <p>南アジアで発祥しその後東南・東アジアへ伝播した仏教は、現代のアジアにおいて今もなお有力な勢力である。しかし、現在のインド仏教徒は640万人（インド国勢調査2001年、人口比0.8%）で、人口の8割以上はヒンドゥー教徒である。ヒンドゥー教は国教ではないが、インド人口の大多数が信仰しており、1998年にヒンドゥー至上主義的傾向の強いBJP (Bhāratīya Janatā Party, インド人民党) が政権与党になったことで、仏教徒を含め、宗教的マイノリティの危機感は強められている。</p> <h3>1-1.3 つのタイプのインド仏教徒</h3> <p>現代のインドには主に3種類の仏教徒がいる [図1参照]。それらは、(1) アンベードカルという指導者（故人）を信奉して不可触民差別の撤廃を目指すもので、その多くは1956年の集団改宗によって生じた集団、(2) ベンガル地方を中心に居住するブッダの時代からの仏教徒で、自らを「伝統的仏教徒」と自認する集団、(3) ダラムサラ（ヒマーチャル・プラデーシュ州）を中心に活動を展開しているダライ・ラマ法王を信奉するチベット系の仏教徒に大別される。これら、存在形態も関心も異なるそれぞれの仏教徒集団が、インド亜大陸においていかなる社会を構成し相互関係を持っているのか否かを調査するのが留学の目的であった。これまでの調査を通して、3つの仏教徒集団が地域的に棲み分けていることは判明していたため、留学中に実施した調査では、それぞれの仏教徒集団が重要視する活動、価値観、将来像とそれらを支援・促進する内外の市民運動（NGO活動）に焦点をあてた。ベンガル地方の「伝統的仏教徒」に関し、誰がベンガル仏教徒なのか、ということ特定する作業からはじめなければならなかったことは、予想外の展開となった。</p> <h3>1-2. 調査手法と環境</h3> <p>留学期間中、在籍している所属機関と調査地を往復した。主要居住地域が異なる3種類の仏教徒の実態解明が研究の骨子であるため、情報の得られる調査地を常に移動して調査を蓄積した。ある程度調査が進行したところで調査内容を所属機関の指導教授に報告書として提出し、当該教授の指導を受け、そのフィードバックを踏まえて調査・分析手法を随時検討・変更しながらさらに調査を進める、という方法をとった。</p> <p>上述した3種類の仏教徒のうち(1)に関しては、インドにおける仏教徒人口として最大勢力を成す集団で、彼らはアンベードカルを信奉しており、インド中央部のマハーラーシュトラ州に多く居住している。不可触民解放運動とも連動している彼らの実態を把握するため、これら仏教徒のメッカであるナーグプル市を中心に調査を進めた。他州に比してマハーラーシュトラ州に居住する仏教徒の分布は多く、ナーグプル市もムンバイに次いで仏教徒人口を多く抱える都市であるが、絶対数としてみれば、ナーグプル市であっても仏教徒人口は15%に過ぎず、圧倒的多数はヒンドゥー教徒（76%）である。しかし、不可触民解放運動の中心地の一つということもあり、自らを仏教徒であると表明することに抵抗感が少なく、家の外装に仏教をモチーフにした装飾物を使用する家屋も多いのに加えて、挨拶の際にその地域の仏教徒のみが使用する言葉を挿入するため、外見や言葉遣いから仏教徒であることが比較的判明しやすい環境である。したがって、居住地、外見、雰囲気などから仏教徒と接触しやすい調査環境であった。</p>					

図 1: インドの行政地図



ヒマーチャル・プラデーシュ州：
チベット系仏教徒が多く居住する

サールナト（ウッタル・プラデーシュ州）：所属機関の所在地

西ベンガル州：
「伝統的仏教徒」が多く居住する

ナーグプル（マハーラーシュトラ州）：故アンベードカルを信奉する、集団改宗を経た仏教徒が多く居住する

出所：インド国勢調査のウェブサイト (<http://www.censusindia.net/>)

(2) に関しては、インド東部の西ベンガル州に多く居住するという情報はあるものの、実際のベンガル仏教徒と接触することは意外にも困難であった。なぜなら、既存の文献で記述されているベンガル仏教徒の多くは、バングラデシュの仏教徒のことを扱っており、現代インド社会におけるその人口、社会的地位、信仰の形態などは判然としないからである。歴史的に、1947年以前のバングラデシュはインドであった。印パの分離独立の結果、当時ベンガル州の一部だったバングラデシュはインドと東パキスタン（現バングラデシュ）に分割された。この意味において、インド、バングラデシュ両国のベンガル仏教徒は社会・文化的に同根であり同じ背景を共有している。しかしこの分断後、バングラデシュのベンガル人仏教徒に関する研究は進み、ベンガル湾周辺に居住するベンガル仏教徒に関する包括的な研究はある一方で、インドのベンガル仏教徒に関するものは知られていない。私がかつてインドで会っていたベンガル仏教徒たちも、実はバングラデシュ出身だったなどという事実も判明し、よくよく検討してみれば、インドのベンガル仏教徒を特定することが意外に難しいという問題に直面した。外見、言語等である人が仏教徒か否かを判別することはできない。したがって、まずインドにおいてベンガル仏教徒と接触することに努めた。

(3) に関して、ダライ・ラマ法王を信奉する仏教徒はインドから見れば本来は外国の仏教徒であるが、インドとチベットの歴史的関係や19世紀以降の政治的な駆け引きを通じ、インドとの密接な関係性の中で生活しているのがチベット系の仏教徒である。インド国籍を保持しているチベット系仏教徒の一部は政界にも進出し、インドのマイノリティ集団としての地位を築いている。アーリヤ・ドラヴィダ系の茶褐色の肌色を持つ一般のインド人とは異なり、モンゴロイド系の黄色の肌や顔立ちが特徴的であるため、一見してチベット系であると判別できる人々である。また、チベットから難民としてインドに流入してきた人々に対しては、インド政府や国際機関の援助も活発に行なわれているため、我々外国人との接触に対する抵抗感が少なく、比較的調査しやすい雰囲気があった。

2. 成果内容

2-1. インド仏教徒連帯の萌芽

結論を先取りすれば、3種類の仏教徒の間の交流・連帯は現時点ではほとんど存在しない。それぞれが仏教徒となった経緯や集団の抱えている社会的問題などの相違は、それぞれの集団の過去に対する認識と将来進んでいきたい方向性を規定し、それらが交わること、あるいは歩みを共にすること、具体的にはインド全体の仏教徒を束ねるような動きに発展することは恐らくないと思われる。この意味において、インドにおける各仏教徒集団は個別に存在し、それらが連帯して一つの仏教徒集団を形成する可能性は皆無に近い。ただ、それぞれの集団の利害・論理を超え、自集団内での社会運動を推進する上での知識や技術の面で連携をとり、それぞれのノウハウを共有しようとする萌芽は存在する。問題意識も関心も異なるインド内の各仏教徒、ならびにアジアを中心とする仏教徒（特に僧侶）が社会開発や仏教教義の理解の点で情報を共有し、仏教徒社会のさらなる発展と共生を図る動きである。この動きを推進する重要な役割を担うのが、NGOの存在である。

2-2. コネクターとしての国際 NGO の役割

特に TBMSG (Trailokya Bauddha Mahasangha Sahayak Gana) の活動は注目に値する。以下に述べるとおり、西洋人が積極的に関与する TBMSG の活動は、同組織のナグプル進出当初は仏教の伝統、特にアンベードカルを信奉する仏教徒たちに悪影響を与えたと考えられていたが、地道な社会福祉ならびに布教活動により、現在では開明的な外国の仏教系組織であるとの社会通念を形成するに至った。TBMSG は、1967年にイギリス人僧侶サンガラクシタによって創設された Friends of the Western Buddhist Order (通称 FWBO) のプーナを拠点とする在インド組織である。FWBO は、西洋社会を中心に世界 19ヶ国、インドを含むと 20ヶ国に支部があり、サンガラクシタによって創設された仏教徒組織である。西洋文化に根差しながら仏教を西洋に根づかせようとするもので、上座仏教、大乘仏教、チベット仏教をとにも取り入れた、総合的な形のものである。インド国中には 23ヶ所の拠点がある。TBMSG の組織では、信者は仏教の習得具合によって初心者レベルのサハイヤク、中級レベルのダンマミトラ、上級者として前2者を指導するダンマチャリに位階づけられる。ダンマチャリは「三宝を良く学ぶ者」と認定されて、日本の僧侶が懸けているような袈裟状のものを懸けることを許され、在家として他の信者の指導にあたる。ナグプル市郊外にあるナーガロカ支部の場合、インド人男性 13人、インド人女性 3人がこの任にあたっている。ダンマチャリは TBMSG 施設内で、仏教の象徴である青い色のクルター（男性の場合）やサリーもしくはサルワール・カミーズ（女性の場合）を着用している。TBMSG ナーガロカ支部のダンマチャリの話によると、ナーガロカ支部に通う信者の多くは年齢層 12～25歳の男性が多いと言うが、私の所見では、ナーガロカ支部に通う信者は 30～50代の男女に多いように見受けられた。また、彼の所見では、ほとんどの信者は指定カーストに属し、指定カーストの割合は、マハール（アンベードカルに従う仏教徒で、マハーラーシュトラ州の有力指定カースト）85%、チャマルおよびバンギー（両者とも、マハーラーシュトラ州の有力指定カースト）15%である。階級構成比は、中間階級 40%程度、下層階級 20～25%、上層階級 5～10%であるという。

TBMSG の活動は、西欧の先進諸国に財源を持つため、豊富な資金力を活かし、社会インフラの整備と人材育成を中心とする。同敷地内には礼拝のための本堂や仏教書・アンベードカルの著作・教祖サンガラクシタの説法テープなどが利用できる図書館もある。仏教徒の貧困家庭の子弟教育援助を目的としたホステルを建設するなど、社会福祉活動、教育・医療奉仕活動にも熱心である。低階層の中でも特に指定カースト（元不可触民）層への医療・教育活動を重視するミッシヨナリーな色彩が強い。ナーグプル市での布教活動の拡大に伴って「アンベードカル」を強調し始めた。ナーグプル仏教徒のみならず、一般のカースト・ヒンドゥーも仏教教義や瞑想の仕方を学ぶために訪れる。仏教への理解の深度に合わせて信者のランク付けを行い、仏教徒知識人・富裕層に人気がある。

この TBMSG が施設を提供して、2005年9月に「社会参加する仏教徒の国際ネットワーク会議」(International Network of Engaged Buddhists Conference) が開催された。この国際会議は、INEB (International Network of Engaged Buddhists) という仏教を紐帯とする国際 NGO が主催するもので、これまでもアジア各国の仏教徒を集めて過去3回開催されているが（於：韓国ソウル）、第4回会議の開催にあたり、INEB メンバーでもある TBMSG ナグプルの代表者ローカミトラがオーガナイザーになってナーグプル市に招致したものである。

INEB は、ダライ・ラマ法王（1989年にノーベル平和賞を受賞したチベット仏教の僧侶）、ティ・ナット・ハン僧侶（ベトナム人僧侶）らが中心となって1987年に創設された仏教系の国際NGOで、教育、精神修養、ジェンダー問題、人権、エコロジー、開発の問題などに積極的に取り組んでいる。基本的には仏教徒間の交流を深める活動を行うが、(a) 仏教徒に共通する問題・関心を共有する、(b) 社会的責任に対し積極的にかかわりをもとうとする仏教徒間に連帯意識を醸成する、(c) 異文化・異伝統の中で改革に取り組む仏教徒に問題解決に向けた情報共有の機会を提供する、という目標を掲げている。ナグプル市で開催された第4回会議の参加者の主な出身国・地域は、チベット、台湾、韓国、日本、ベトナム、ミャンマー、インドネシア、イギリスで、その他世界各国から来た仏教徒が出家・在家を含めてインドに集まって、仏教徒の連帯について語り、連帯を深めた。

このような会議は、インドに居住する3種類の仏教徒にとっては初めての試みであった。一般的に、「伝統的仏教徒」を自認するベンガル仏教徒は、不可触民からの改宗者の多いアンベードカルを信奉する仏教徒とは言語も文化も背景も異なる集団であることを強調する傾向がある。インド憲法においてカースト制度に基づく差別が禁止されてはいるものの、現実社会においてはカーストによる身分を事由とした差別が根強く機能している。不可触民とはカースト制度にも組み込まれない人間以下の不浄な存在とされ、宗教的・社会的無能力を強要される人々である。現在の行政用語では指定カーストと呼称される。また、チベット系の仏教徒は、その出自がいわゆる一般のインド人ではなく、ヒマラヤ文化圏を形成する血筋を有するとの自負のため、集団改宗を経たアンベードカルを信奉する仏教徒やベンガル仏教徒とは当初から独立して信仰と社会を維持してきた。事実、インドから仏教が「消滅」したといわれる13世紀から集団改宗の起きた1956年まで、インドで仏教徒といえばこれらチベット系の仏教徒が一般的な仏教徒として知られており、インド人仏教徒はいないと考えられてきた。実際には、現バングラデシュ（かつてのインドの一部）も含めベンガル地方に細々とベンガル仏教徒がインド人口の0.05%程度いたものの、マイノリティとしての地位のため、ヒンドゥー教と混交した仏教体系に変容しており、ヒンドゥー教徒と区別つかない生活をしてきた。

ヒンドゥー教との混交著しいベンガル仏教徒は、その宗教実践において他の仏教徒から批判の対象となり、現在では数の上で最も多い集団改宗を経た仏教徒もアンベードカルに対する傾倒の強さから仏教徒（Buddhist）ではなくアンベードカル教徒（Ambedkarist）だと揶揄されてきた。チベット系の仏教徒はダライ・ラマ法王に対する帰依が顕著であるため、ベンガル仏教徒や改宗を経た仏教徒から見れば、インド人とは異なる言語・経典を奉じる、違和感のある存在であった。

このような状態が数世紀に亘り長く続いたため、インドにおいて統一した仏教徒の組織や活動は存在せず、インド社会に大きなインパクトを与えた1956年の仏教への集団改宗以降も、3種類の仏教徒が連帯する動きはついぞ起きなかった。そういった状況を打開したのが、上述した国際NGOのINEBであり、インド国内でいえばTBMSGなのである。これら国際NGOは、これまで接点をもたなかった異なる背景を持つ仏教徒集団を結びつける役割を果たしている。

2-3. アイデンティティとしての仏教信仰

いずれにせよ、そして仏教実践においていかなる相違があろうとも、インドの主要仏教勢力を形成する3種の集団は、いずれも仏教をそのアイデンティティとして強く意識する者たちである。

ベンガル仏教徒が本当にブッダの頃から帰依した者の末裔であるならば、仏教発祥の当時から仏教の持つ思想体系と実践を取り入れ、今日まで受け継いできた集団である。また、集団改宗から50年以上を経た今日、差別からの解放という手段として仏教を受容し改宗を経た仏教徒でも、そのアイデンティティの中核に仏教がある。一方、チベット仏教徒は、仏教というアイデンティティが故に中国政府から迫害され難民となった人々である。差別撤廃・社会改革・正義をそれぞれ掲げる人々の拠り所として、仏教が重要な位置を占めていることがわかる。インドに居住する仏教徒はその出自にかかわらず、自己アイデンティティ形成過程において仏教が大きな比重を占めている。

そもそも後世ブッダとなったゴータマ・シッダールタの教え（仏教）は、当時支配的であったヒンドゥー教・ヒンドゥー主義が抱えていた矛盾と社会問題に対するアンチテーゼとして広がった。ということは、仏教にそもそも社会改革と平等への視点が内包されていたということである。

教義解釈や実践の面で、ブッダの言葉の何処に注目するかなどの差異によって、上座部仏教・大乘仏教などと識別されるが、インドではいずれの仏教徒集団も各コミュニティの矛盾と問題を解決するために努力を重ね、やっと2005年以降、3者の交叉点を見出すに至った。現時点では、3者の積極的な交流や活動提携は起きていないが、TBMSGという外国の仏教系NGOを仲介者として、協働が試みられている。

3. まとめと今後の課題

歴史的に接点を持たなかったインドの各仏教徒集団が、21世紀になって協働の姿勢を示し始めたことは興味深い。独立した集団を結びつける役割を外国のNGO、つまり当該コミュニティ内部の存在ではなく「よそ者」が担っているというのも面白い。「よそ者」が積極的に関与することで、コミュニティ内部にはなかった発想や視点が生まれ、閉じた社会を開いていく風穴になるようである。本稿ではインド仏教徒との関わりを持つ多数のNGOの詳細を逐一述べることはできなかったが、それらの大多数は外国のNGOであり、行政手続の関係上インド国籍を有する者でも、元来の出自と思考は「外国人」であった。それぞれのコミュニティが抱える問題も進んでいこうとする方向性も異なる彼らが、人種や地域性を越えて宗教を抛り所とする連帯に、問題解決の突破口を見出している現状を、この留学を通して身近に調査することができた。

グローバル化や国際化が益々進行する今日の状況を鑑みるに、このような動きが活発になり、各仏教集団が自コミュニティを相対化する視点を発達させ、さらなる社会改革と開発を行なえるようになることが期待される。また同時に、他者を正当に批判する視点に加えて、尊重と相互理解に基づく共生の視点も発達させることができれば、近年問題になっている宗教をイデオロギー対立に利用する民族紛争の解決に向けた第一歩になると確信する次第である。

国境をまたがった仏教徒間の交流がインド国内で反目しあっていたインド仏教徒を結び付け始めたように、宗教を紐帯とする連帯のあり方は、国境に捉われない人々の協働を可能にする。だが一方、宗教や地域性を強調することで、特定の民族・集団の独自性を先鋭化し武力を使用してでも主義主張を通し、分離・独立を達成しようとする動きも起きている。したがって、人間のもつ価値観が政治・経済を含めた意思決定プロセスにどのように影響するのかも含め、宗教を軸とする人間の結びつきが紛争解決や平和開発にいかに関与できるのかということをも具体的に考察していくことが今後の課題である。

4. 謝辞

今回の一連の調査において、インド国内を自由に移動してフィールド調査を存分に遂行できたことは、インド留学という機会を与えられたから可能になったことである。インドにおける日常生活の中で生活者としての私が入手できる情報や環境の中で何が見えてくるのか、さらに大多数の非仏教徒の目には何が映り、マスコミをはじめ一般のインド社会では仏教徒がどのような立場におかれているかをつぶさに観察することは、訪問型の調査ではなく留学という形態でしか実現しなかった。このような有意義な留学の機会と惜しみない協力を与えてくれた松下国際財団の方々、ならびにインド各地の調査協力者の方々に心から感謝申し上げる。



写真1：スジャータ寺にて

ブッダガヤ（ビハール州）のスジャータ寺（ブッダが村娘スジャータから乳粥の布施を受けた場所を記念した建てられた寺）に参詣に来ていたマハーラーシュトラ州から来た在家の仏教徒たちと記念撮影



写真2：大菩提寺奪還闘争のデモ行進

ブッダガヤ（ビハール州）にある大菩提寺（ブッダが菩提樹の下で瞑想を行い、悟りを開いたとされる、仏教徒の聖地の一つ）の所有・管理・運営権はヒन्दゥー教徒の手に委ねられている。それら権利を仏教徒の手に取り戻すための運動が、インド仏教徒の最大勢力であるマハーラーシュトラ州を中心とする仏教徒が中核を担って行なわれている。



写真3：蜂起記念日のデモ行進

- チベット人が難民化し亡国の契機となった蜂起（1959年3月10日）を記念する日に世界各地の亡命チベット人がデモ行進をする。
- 僧侶が先頭に立ち、デモを牽引していく。僧侶に次いで、尼僧、学生、在家一般人の列が続く。ダラムサラ（ヒマチャル・プラデーシュ州）